『人生の設計図』

聖ヶ丘サテライトクリニック　院長　岡本 拓也

七人同胞の末二人として生まれた姉と妹は、ずっと一緒に暮らしてきた。

姉は早くから精神疾患を発症したこともあり、仕事はしておらず、家事もほとんどやっていなかった。仕事をして生活費を稼ぐのも家事をするのも、もっぱら妹の役割だった。

努力家の妹は、工業高校を卒業後、仕事をしながら少しずつ独学して、最終的には1級建築士の資格を取り、その方面の仕事をしていた。母親の誕生日のお祝いに、妹は自分が設計した家を新築し、その家に三人で暮らした。母親の最期の日々、姉妹二人は、母の傍で『ぞうさん』や『故郷』などの唱歌を繰り返し歌った。その家で、姉妹二人は愛する母を看取った。

妹に癌が見つかったのは、まだ50代の半ばを過ぎた頃だった。姉妹のどちらかが癌を患う定めなのであれば、せめて逆であればよかったのに、と姉も妹も思った。しかし、現実は違った。世話をしていた側の妹が世話される側となり、世話をされる側であった姉が世話する側にならざるを得ない状況に、次第になっていった。

妹は願った。自ら設計し、母のために建て、母を看取ったこの家で、姉と一緒に最期の日々を過ごしたい。姉も、どこまでできるか自信はないけれど、家で一緒に過ごしたいと思った。

簡単ではなかった。家事がまともにできず、乾麺を茹でることすらも難しい姉。さまざまなサービスを入れながら、何とか姉妹二人の生活を支える方法を皆で考えた。いつまで家で過ごせるだろうか？私たちも、おそらくは本人たちも、最後まで家に居ることは難しいだろうと思っていた。

現実は容赦なく進行して行く。寝室がある1階から生活空間である2階まで上るのに数時間を要するようになり、やがてそれも断念した。トイレや食事にも介助を要するようになり、遂には寝返りさえも打てなくなった。訪問介護の内容を見直し回数も増やして支えを強化していったが、それでも姉の負担は増える一方だった。毎日様々な職種が訪問する機会に、姉の心身の状態を注意深く観察しながら、妹がいつでも入院できるように準備を整え、入院してもらう時期を図っていた。

ところが、私たちの予想をはるかに超えて（おそらくは本人たちの予想も超えて）、姉妹はふんばった。姉妹自身が諦めない以上は、私たちも何とかしてその生活、その願いを支えるべく工夫を重ねて行った。特に担当のケアマネは、仕事の枠を超えて関わった。著明なリンパ浮腫もあって身動きのできない妹にとって、暑い夏は鬼門だった。しかも、妹が寝ている部屋には日差しを遮るカーテンがなく、窓を開けておくために必要な網戸もなかった。ケアマネは、経済的に苦しい姉妹のために、網戸やカーテンを取り付ける作業を自ら買って出た。妹の世話のために姉の通院が滞っていたことを知るや、姉が通院できるように、姉の代わりに妹の傍にいてあげたりもした。姉同様に、ケアマネ自身も自分がどこまでできるかわからない中、それでも、この姉妹のためにできるだけのことをしてあげたいと思うようになっていった。姉妹の人柄や奮闘努力、これまでの姉妹の人生の歩みと姉妹が置かれた状況などを目の当たりにする中で、自然とそういう思いになっていた。

やがて、その日はやってきた。いつ逝ってもおかしくない状態ですと私が伝えた後も、姉を一人ぼっちにはしたくなかったのだろうか、妹は1週間を持ちこたえた。その間、姉はかつて元気だった頃の妹と一緒に母の枕元で歌った歌を、優しく妹の身体をさすりながら“ぞうさん、ぞうさん…”と繰り返し歌ってあげていた。その歌声は、哀しい愛情に溢れていた。

一人の人生が静かに幕を下ろした。自ら設計し、そこで自ら最期を迎えた家と、ずっと一緒に育って生きてきた姉を遺して。「淋しいねえ…特に、夜が淋しいねえ…」と一人遺された姉は言う。人生は思うようにはならない。家の設計図を描くように人生の設計図を描くことはできない。それでも人間は生きて行く。ままならない人生を生きて行く。ままならない人生を生きて行く私たちは、互いに支え合って生きて行く他ないのだろう。